

米沢を離れた旧米沢藩士の上杉神社の崇敬

上杉松岬両神社信仰会会員 加澤昌人

はじめに

明治四年（一八七一）八月、上杉齊憲は、それまで米沢城本丸の御堂で祭祀していた謙信を、仏式を改め神式で祭祀するという大改革を行った。嘉永二年（一八四九）十二月に火災で焼失した御堂を、自ら再建して以来二十数年にしての、謙信祭祀の大転換であった。藩政期の御堂は、いわば密室的な祭祀であったが、上杉神社となつてからは、庶民にも広く開かれたものとなった大変革である¹。

以来教えて令和二年（二〇二〇）は、百五十年目にあたる。この記念の年の四月二十九日の御例祭は大いに賑わうことであろうと思われた。しかし春先からの新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、規模を縮小して役員のみ参列となった。市民あげての「上杉まつり」も、一時は秋に延期するとされたが、結局は中止と決まった。世情やむを得ないことであったが、神社所縁の人々にとっては至極残念なことであり、当日は各自が神社の御神徳を偲び、遙拝したことであろう。

さて、この明治四年（一八七一）には、廃藩置県が行われて米沢藩はなくなり、藩からの俸禄を失った旧藩士の中には新たな生活の糧を得るために、米沢を離れた人々も少なくない。彼等が新天地で心の拠り所としたのは、旧藩以来連綿と続く、謙信、鷹山への崇敬の念であった。

明治五年（一八七二）、すべてを民費により建立された上杉神社は、県社となり、その後は毎年賑やかな祭典が行われることとなる。

その後、明治二十二年（一八八九）十一月二十三日の新嘗祭当日に、東京在住の伊藤忠太をはじめとする六名が、「有爲會²」を発足させ、翌二十三年（一八九〇）二月には会誌『米澤有爲會雜誌』（以下『雜誌』という）を発行して会員の募集を開始した。この年の年末には会員は四百二十九名に達している。同二十五年（一八九二）には「米澤有爲會」（以下「有爲會」という）と改称した。

有爲會の各支部では、毎年四月二十九日の米沢の上杉神社例祭日に合わせて遙拝式を開催した。また米沢から北海道厚岸郡太田村（厚岸郡厚岸町）に入植した屯田兵も、入植の翌年から遙拝式を開催し、後にはその地の上杉神社（米沢との混同を避けるため、以下「太田上杉神社」という）を建立するに至った。彼等は、こうした遙拝式や神社建立の様子を『雜誌』に投稿し報告している。

本論では、明治期の遙拝式の様子を、『雜誌』の中からいくつか取り上げ、当時の人々の謙信と鷹山に対する崇敬の念をとらえていく。また屯田兵として入植した人々の生活と、神社を建立するまでの経緯を追って、同じく謙信と鷹山に対する崇敬の念がいかなるものであったかをとらえていく。あるいは、筆者が現地を確認した、厚岸町太田屯田開拓記念館に所蔵される太田上杉神社関係の史料の中からいくつかを紹介したい。

なお、令和二年（二〇二〇）は、屯田兵入植百三十周年の年にもあたっている。

なおまた、本稿は、令和二年に発表した拙稿「米沢を離れた旧米沢藩士の上杉神社の崇敬―屯田兵による神社の建立及び米澤有爲會支部における遙拝式から」³を改稿したものである。

第一章 米澤有爲會の各部会における上杉神社遙拝式

第一節 札樽部会の遙拝式

明治二十六年（一八九三）四月二十九日、札樽部会（札幌及び小樽に居住する会員による支部）は、「上杉神社の尊影及び莅戸太華翁の小照」を所持する杉原謙が会主となり、札幌神社の宮司を齋主として「最も厳肅にして且盛大なる祭典を執行」した（『雑誌』一八九三年五月第三五号「札樽部例会并に上杉神社祭典」）。

これより以前も、杉原は毎年米沢の上杉神社の例祭日に合わせて知己の者を招き祭典を行っていたが、この年の三月に札樽部会が発足したことにより、五月の例会を繰り上げて、この日の遙拝式が行われた。

遙拝式には三十余名が参加し、中には米沢出身以外の「両尊霊の威徳を欽仰する人々」も含まれていた。

四月廿九日は、吾人の最尊敬する上杉神社の例祭日に当れり。吾人客土に在りといへども、誰か此祭日を記し、礼拝の儀を尽さざるものあらんや（中略）上段の間に壯嚴なる祭壇を設け、正面に両神影を鎮し、少し下りて左に太華翁の小照を、右に武尊公の遺墨、鷹山公の傳國の御書并に太華翁の遺墨を掛けしは、用意最も至れるものと云ふべし。札幌神社宮司白野夏雲は（中略）祝詞を朗読し、次に会員及來賓、逐次玉串を捧げ礼拝。

そして、祭典終了後は直会となる。

各々胸襟を啓らきて（中略）談するところ語るところ、尽く武尊公の義勇天下に比なきと、鷹山公の恩沢百世に洽ねきを追賛するにあらざるなく（中略）鷹山公の伝國の御書に至りては、万坐感歎せざるなかりし（中

略)武尊公の霜満軍営の御作を吟するあり、或は頼子成の鞭声肅々の作を歌ふあり。

ここにいう「両神影」はいうまでもなく謙信と鷹山である。「太華翁」莅戸善政は、この後明治四十一年(一九〇八)九月に東宮(後の大正天皇)の東北巡啓にあたり贈正五位に叙せられ、さらに後に松岬神社に合祀されるが、当時から崇敬の対象となっていたようである。

また、「鷹山公の伝国の御書」は「傳國之辞」ともいわれ、鷹山が天明五年(一七八五)に世子治廣の家督にあたつて与えた三ヶ条の教訓である(『治憲年譜』天明五年二月七日の条)。

一 国家ハ

先祖ヨリ子孫へ傳候国家ニシテ、我私スヘキ物ニハ無之候。

一 人民ハ国家ニ属シタル人民ニシテ、我私スヘキ物ニハ無之候。

一 国家人民ノ為ニ立タル君ニシテ、君ノ為ニ立タル国家人民ニハ無之候。

藩主は国と領民のためにあるものだとする戒めである。民主主義の精神の表れであり、後世にアメリカ合衆国大統領ジョン・F・ケネディ氏の賞賛するところでもある。この鷹山の精神には「万坐感歎せざるなかりし」であつた。

あるいは「武尊公の御作」は、謙信が天正五年(一五七七)に能登を平定したときに、七尾城で詠んだ漢詩「霜満軍営……」である。「頼子成の作」は、頼山陽の漢詩で「鞭声肅々……」の、謙信が武田信玄と一騎打ちをしたとされる永禄四年(一五六一)の川中島合戦を詠ったものである。謙信麾下の将として数多くの戦に臨んだ者の子孫として、謙信の勇姿を称えることはいうまでもない。

第二節 仙台部会の遙拝式

仙台では明治三十年（一八九七）以前から遙拝式が行われていた。同三十年には広瀬川を挟み仙台城址の対岸にあたる桜か丘公園の東北随一といわれた料理店悒翠館で行っている（『雑誌』一八九七年五月第七五号「在仙米沢人上杉神社遙拝式」）。

緑滴る若竹を立て幕を張り、（注連縄）志めを結びて祭壇を築き、傍らには紺地日の丸の旗を建てたり。此旗は吾人の祖先が河中嶋の合戦に翻かへして、甲州勢を切り捲くりしものの倂なり。

この「紺地日ノ丸旗」は、謙信の父長尾為景が朝廷から賜ったもので「日ノ御旗」「御家ノ旗」とも呼ばれ、上杉家の重宝である。謙信は出陣式にあたりこの旗に摩利支天を勧請し本尊として祈願（出陣式）した。これを模した旗が目印であった。これに先祖の面影を慕ったのである。

この日の遙拝式は二百五十余名が参加したが、その約三分の一の八十余名が軍人であった。この日は木曜日であったが、十七聯隊と三十二聯隊の大隊長が「旧藩祖の為めなれば」と、特別の休暇を与えたことによるものであった。この日の盛会は「二公（謙信・鷹山）の遺徳然からしむる所」であるとしている。

また同三十四年（一九〇一）には、仙台城北、青葉神社の丘続きの陸軍演習地の台の原で行った（『雑誌』一九〇一年五月第一一五号「在仙台米沢人上杉神社遙拝式」）。

数間四方に上杉家の幔幕を張り、注連縄を結んで祭壇を築いた。目印に立てられたのは、ここでも「紺地日ノ丸旗」であった。祭事の後は運動会が行われた。報告の最後には、自分たちの先祖が、乱世に大義を掲げた謙信、殖産興業で藩を改革した鷹山の臣下であったことを、誇りとして忘れることなく、郷里や国家のために尽くすべ

きことを誓っている。

乱世の世にありて尚大義をしきて、永く我國民に教へ給へる不識公、殖産興業の道に頼国を興し給へる鷹山神君、今米沢の民をして安堵処を得せしめ給へるの恩徳、我等はなを忘れんや。やがては郷の為、国の為尽さて止むへき。我等が祖先は亦二神君の麾下にありしものを。(齋藤浩君報)

さらに同三十六年(一九〇三)には次のようにある(『雑誌』一九〇三年五月第一三五号「在仙台上杉神社遙拝式記事」)。

名も床しき青葉山にて、謹しみかしくみて、藩祖公の靈を祀りぬ(中略)五城楼下にありとあらゆる米沢人は尽く其神前に額づきぬ(中略)式終るや傍の社務所にて小宴を張りぬ(中略)宴を終り、直ちに運動競技の余興に移りぬ(中略)最後に米沢独得の角力競技に移りぬ。

「青葉山」は仙台城址で、「五城楼」は城の別名である。当時から本丸跡には「昭忠碑」(佐賀の乱、西南の役、日清戦争等の戦没者慰霊顕彰碑)があり、その付近で行われたと推測する。今でもこの場所は広場となっていて伊達政宗像がある。昭忠碑の塔頂部には、神武天皇を勝利に導いたとされる金鷄の像が据えられていた。

この頃、米沢出身の海軍中佐山下源太郎(後に海軍大将、連合艦隊司令長官)は、対露開戦推進派であった。ロシアに対する緊張が高まる中、金鷄の像の下で謙信を祀り遙拝式と運動会を行うことは、国威の発揚という運動会の目的にもかなったものといえる。当時の運動会は、健康増進はもとより、国威発揚、富国強兵を目的として行われていたのである。

第三節 山形部会の遙拝式

山形部会では明治三十六年（一九〇三）四月二十六日の日曜日に、数百人の参加を得て千歳公園（現在の山形縣護國神社付近か、同社の現在地遷座は昭和九年（一九三四）で行っている『雜誌』一九〇三年五月第一三五号「在山形米沢人上杉神社遙拝式記事」）。

祭壇は一段高く設けられ、多くの神饌を供え、その脇には宝物の刀劍や甲冑が飾られた。そして、この時の祭詞には次のようである。

太祖謙信公天資栄武（中略）義旗の指す所（中略）荆棘を排て、天庭に朝し退虎の劍を賜ひ、勦賊そうぞくの任を授けらる。（中略）勤王の大義、群雄の模範となる。中宗鷹山公（中略）勤儉親ら四民を導き給ひ、奢侈を抑制して殖産興業の道を開き、又一方には學を建て士を励し給ひ（中略）各藩の師表なる。（中略）庶民尊崇して仰て上杉神社といふ（中略）祖先の時より徳沢に浴すること特に深く、化育を被ること実に久し。現時身は他郷にありと雖も、御恵の宏遠なる未だ忘れず。（中略）髣髴として降臨せられよ。

謙信の「義旗」を掲げて戦う姿は朝廷に達し、綸旨と劍を賜り、これは群雄の模範となった。また鷹山の殖産興業と学問の奨励による藩政改革は他藩の師表となった。その恩徳は先祖代々深く蒙っており、他郷にある今もそれは忘れられないものであるとしている。

この後は、恒例の運動会が催された。競技には陸上競技の他に、武勇を競う銃槍術や擊劍というものもあった。宝物の刀劍や甲冑を飾り、銃槍術や擊劍という実戦にも役立つであろう競技を行うことは、国威発揚、富国強兵につながるものといえる。

一方これらは、「愉快なる間に、一は其旧情を温め、一は以て遙かに先主の余徳を敬仰し、我米沢人をして益

々社会に活歩せしむる所あらんとす」ものでもあるとしている。

その後同四十年（一九〇七）四月二十八日に千歳公園で行われた（『雑誌』一九〇七年七月第一七五号「上杉神社遙拝式」）。この日は、軍人、学生、有爲會會員合わせて二百名を超す参加者で、「敬ひ畏み千代も尽きせぬ深き御恵の程を感謝」した。この日の祭文の一節には次のようにある。

おほん神は（中略）^{（謙信）}猛くかたましき者共をば、青竹を裂き割ること、はらくくに打ちきため給ひ、うつくしくまめなる人々をば、雨露のうるほすごと、めぐみはぐくみ給ひ、上は天皇が大朝廷に敬ひ仕え給ひ、下は仇なふ敵にまで堅く正しき操を立て給ひ（中略）その御徳の程高しとも、いや高にましませば、百年の後の明治の大御代に、高く尊き別格官幣の御社といつかれさせ給ひて（中略）民てふ民よりもろく仰ぎ祭られおはします、げにありがたく畏き、おほん神になんありける。

謙信の潔い戦いぶり、庶民への慈しみ、尊皇の志、敵に対する律儀という徳によって、上杉神社は別格官幣社に昇格して、ますますありがたい神となつて、広く市民からも讃えられ祀られているとしている。そのためか、祭文に鷹山に関することはみられない。

式典後は運動会に移り十数種の競技を行った。この日は、「勇ましきあり優しきあり、滑稽洒落なるあり、満場思采の裡に局を結ぶ」と、和やかなものとなっている。

第四節 京都部会の遙拝式

京都部会の遙拝式の始まりは、明治四十年（一九〇七）と遅かった（『雑誌』一九〇七年五月第一七四号「京

都市に於ける上杉神社遙拝式」。四月二十八日に、円山平野屋に二十三人が集い行わた。これは円山公園内の知恩院南門前にある料理屋である。

藩祖謙信公、中興の鷹山公の御恵は、米沢に食をはみし者の苟も露忘れざる処、今や郷関遠く相隔つとはいへ、祭りの庭厳かに飾らるるを思ひては、誰か玉串捧げんの思動かざるべき（中略）祭壇は厳かに飾られぬ。

緞帳ゆるやかに垂れ、両公の御肖像は奥深くかゝげられ（中略）各人の着席終るや、緞帳は絞り上げられ、御肖像厳かに拝まる。

ここでも、謙信と鷹山の恩恵は故郷を離れても忘れがたいものであるとしている。やはり拝む対象は謙信と鷹山の画像であった。

そして懇親会となったが、「絶えず蓄音機もて座興を助く。琵琶川中島、詩吟鞭聲肅々、及霜満軍營など特に感興深く」と、謙信にまつわる漢詩が場を盛り上げている。さらに大津と神戸から突然の参加者も加えたことは、「油然として温情わき、快談は沛然として起り、京の地に米沢を現出せるの思あり」であったとしている。

故郷を離れた人々が年に一度集い、上杉神社の遙拝式や運動会を行うことは、その時々々の世相や地域の相違で内容は異なるが、その趣旨は、謙信の義勇と鷹山の民政を追賛することであり、彼らの精神的な支えとなっていたのである。

第二章 屯田兵による太田上杉神社の建立

第一節 屯田兵の入植とその生活

明治二十三年（一八九〇）六月下旬から七月初旬にかけて、最後の士族屯田兵として太田村に全国八県（山口・兵庫・和歌山・福井・石川・新潟・宮城・山形）から四百四十戸が入植した。山形県は九十九戸と石川県の百六戸に次いで多く、中でも旧米沢藩は五十七戸と半数以上を占めた（旧藩別では旧金沢藩の五十九戸に次ぐ）⁷。

この旧米沢藩士の中には、本庄、柿崎、市川という旧藩時代は侍組の者も含まれていた。本庄氏は謙信、景勝、豊臣秀吉に仕えた本庄繁長、柿崎氏は謙信に仕えた柿崎景家、市川氏は武田信玄の家臣で後に謙信、景勝に仕えた市川信房のそれぞれの子孫である。

まず、彼らが入植した当時の状況について概観する。（『雑誌』一八九三年四月第三四号、梅澤小三郎「新天地（太田村の三年）」）。

涙を揮ふて故山を辞し、酒田港を出帆（中略）厚岸に着港し、該士民に歓迎せられ旅舎に投ず（中略）抽籤の上各自の居宅を定めらる（中略）是れ即太田村なり。辛ふじて居宅を尋ね、笹を分け漸く家族と共に入り来れば、何事ぞ、炬中に青笹生ぜんとは。嗚呼（中略）誰か之を見て涙なからんや（中略）四辺寂寞樹木は天日を蔽ひ、笹藪密集して隣家をも見る不能。

また、旧新庄藩士西野要三郎も同様に書き留め、「住み慣れし古郷の生活ニ比し、母は極度に悲しみ泣き出しぬ。一家共に泣く」（『西野家行囊帳』¹⁰）と嘆いている。

与えられた兵屋は、前年から当年にかけて標茶集治監の囚人によって建設されたものであったが、既に建物の中には青笹が茂り、すぐに住める状態ではなかった。つまりは未開の地であり、彼らが思い描いていたものとは全く違った生活の始まりであった。

太田村には南太田兵村（第四大隊第三中隊）と北太田兵村（同第四中隊）があり各二百二十戸に分かれていた。兵屋の割当は抽籤で決められたが、旧米沢藩士は一戸を除いて南太田兵村に割り当てられた。¹¹ この一戸は、戸主の急病のため出発が遅れて別便で渡航し、空いていた北太田兵村に入った者であった。

太田兵村の中心地は、現在の J R 厚岸駅から北西に約六キロメートル余りで、一帯が起伏の大きい丘陵地である。現在、厚岸町太田屯田開拓記念館（以下「屯田記念館」という）や太田小学校、太田中学校のあたりに中隊本部が置かれていた。

この広大な土地を機械的に区画した場所に建てられた兵屋であるから、谷地や川があつて耕地には向かない悪条件の所に割り当てられた者も少なくなかつた。しかし不平不満を口にすることもできず、その後は黙々と開墾が進められた。その後一ヶ月間はほとんど中隊本部の監督者指導のもと、笹藪を焼き払い、樹木を伐採した。それにより濃霧も次第に減少して日も差すようになり、入植当時とは一変してきた。秋に至つては、甜菜、馬鈴薯、大根等、多少若干の収穫も得られた。

また、全国各地からの入植であり、言葉が通じないこともあり、行き違いが生じたので、時々茶話会を開き懇親を深め、教師を招いて農事を研究した。あるいは米沢人は生魚を食する風習がなく、入村直後には食べ過ぎて腹痛に苦しんだ者も少なくなかつたという。

この他、旧新庄藩士の岩間富次郎（北太田兵村）は次のように述懐している¹²（『葛籠』^{かつらこ}一九二〇年七月第二二号、岩間富次郎「屯田兵の人々・移住の顛末」）。

樹木鬱蒼たる高原地にして、小笹荆棘繁茂し、開墾にも頗る困難を覚江たり。戸主は重に^{（主）}兵役の義務を帯び、二三月間は毎日練兵場にて軍事教練を受け、軍規風規など思いの外に厳しく（中略）現役三ヶ年間は家族

諸共兵役と農業の外余念なかりし。余等の如き兵務と云ひ農と云ひ更に経歴なき事故、事々に珍しくもあれど、又艱難に堪へざることもあり。

そして同二十六年（一八九三）六月頃には給与地をすべて開墾し終わる見込みとなった。主な農作物はすべて米沢で産するもので、最も適したものは馬鈴薯、麻、麦であった。馬鈴薯は「愛乃土人の培養法」で多くの収穫を得、また麻の品質は北海道随一といわれたという。あるいは、五、六戸共同で馬耕機械を購入し、家畜を飼育して繁殖を図って農作物を栽培すれば、家族六、七人は十分に生活できるとし、新天地での生活に期待している。

しかし太田村では、入植した年のうちに三十九名が死亡し、そのうち十一人は子供であった。¹³ このことから過酷な生活状況がうかがわれる。また大田村を含む根室地方は、寒冷な気候と濃霧のため農耕に適さない土地であり、さらに連作による地味の劣化と施肥技術の乏しさから、次第に農業は衰退していく。そして同二十六年（一八九三）に屯田兵の現役三年を満了して予備役に編入されると、それまでの諸給与が廃されて生計に困難をきたし、部外に職を求める者や近隣の諸村への出稼者が多く現れ、この年をピークに太田村の人口は減少の一途をたどった。

村に残った者は、¹⁵ 大家族を抱えて身動きができない者、行き先のみどが立たない者、頑なに屯田兵精神を貫き永住を決意した者であったという。

第二節 上杉神社遙拝式の開催

こうした過酷な重労働と兵役を強いられた人々は、遠く離れた故郷米沢の上杉神社への崇敬の念を精神的な支

えとしていた。彼らは入植した翌明治二十四年（一八九一）の米沢の上杉神社例祭日には、早くも上杉神社の遙拝式を行っている。

兵籍にある者は日曜日や祭日の他は外出が容易ではなく、四月二十六日の日曜日に隣の真龍村屯田兵倉庫前の丘（現地聞き取りにより厚岸町白浜一丁目付近と推定）で行った。発起人は本庄、柿崎、市川等であった。その様子は次のようである（『雑誌』一八九一年五月第一五号、青木太郎「上杉神社遙拝式概況」）。

四月廿九日は上杉神社の例祭日なるを以て、在厚岸米沢人に於ても遙拝式を行ひ、聊か上杉家を尊崇する微志を表せんと志たり（中略）此日こそは盛んにやり度き者ぞと指をり数へて待ち居りき（中略）集ひ会する者総べて百有余名、厚岸街の梅澤判事も来臨せらる（中略）丘上の中程には、龍と大書したる巾二尺五寸長さ一丈余の唐木綿を以て製したる大旆を建て、前に塩鮭二尾及び御幣、神酒を備へ（中略）石墨神官祭式を行ひ終りて、順序を以て礼拝（中略）四方には上杉神社遙拝式及旧米沢人大懇親会と大書したる二旆を建てたり。

この「龍」の旗は、謙信が総攻撃の際に掲げた軍旗「懸り乱れ龍」を摸したもので、これを神体に見立てて神饌を供えている。明らかに謙信が意識されており、単に同郷の者が集い行う祭りや懇親会ではなく、謙信への崇敬の念が認められる神事であった。

またこの時、「重に殖産業（主）に関する講談をなし、後來大事業を謀るの一大資本社」である「米沢郷友会」の設立が提唱されると、「賛成の声四方に起る。之れと同時に（中略）米沢郷友会万萬歳と大書したる旗を空中に振飄」した。あるいは旧藩主齊憲の顕彰碑建立（同年九月に米沢の上杉神社境内に建立）への寄付金も募られ、「苟も上杉氏の粟を食せし者は、奮て寸志を表せざる可からざる」と決議された。

そして、「大日本帝国万歳、米沢郷友会万歳と大呼連唱し閉会（中略）四旗の旗飾を押志立て、愉快を呼びつづ還路に就きたり」という具合であった。遙拝式も齊憲顕彰碑への寄付も「上杉家を尊崇する微志」から発したものであった。

また次のようにもある（『雑誌』一八九八年九月第八七号、山田理一郎「北海道太田村上杉神社由来」）。

会するもの無慮百五拾余名、大に野宴を張る（中略）上杉伯万歳、同郷人万歳の声は、山岳為めに震動せん許りなりき（中略）嘖、神君の遺徳、北海の浜に追ふ、誰か感泣せざらんや。

やはり抛り所とするのは、「上杉伯（伯爵茂憲）」であり、「神君（謙信）」である。

その後の遙拝式は、同二十五年（一八九二）四月二十九日には村内豊受神社境内で、同二十六年（一八九三）四月二十九日には村外の郊原（記事の景色の描写から前年と同じか）で、同二十七年（一八九四）四月二十九日には加里関阪上理性院でと、毎年行われた。「加里関阪上理性院」は現在確認できないが、「加里関」は当て字で、「仮監獄」を意味し、兵屋を建設した標茶集治監の囚人の仮監獄が置かれた場所一帯をいう。太田二の通りを過ぎた南兵村共同墓地の奥、急坂を下った所である。「理性院」はその坂の上にあったと思われるが、寺院があつた記録等はなく、仮監獄の施設の一部か墓地にあつた施設と考えられる。

なお、太田村の寺社等について少し触れておく。¹⁷

明治二十五年（一八九二）当時は、豊受神社ではなく「神武天皇遙拝所」であつた。遙拝所は、新開地の村内に崇敬すべき神社がないことから、中隊長門田見陳秀（北兵村）、同岩瀨繁隆（南兵村）、及び村内有志等が発起人となつて同二十四年（一八九一）七月に建設し、産土神として豊受大神を勧請した。例祭日は入植皆済日を記念して七月六日・七日とした。その後同二十六年（一八九三）に無格社豊受神社となつた。同三十年（一八九

七)に社殿を新築し、「豊受神社」の扁額は旧米沢藩士本庄孝長が揮毫した。当時の神社は現在地より奥に位置し、見晴らしがよく、社殿は伊勢神宮に向いていたという。

寺院は、いずれも同三十年(一八九七)に臨済宗報国寺(南禅寺直末)と真宗鮮明寺(東本願寺直末、現在廃寺)が創設され(それ以前は説教所)、兵村の者はそのいずれかの檀家となった。故郷の寺とは違う臨済宗への宗旨替えに苦慮した者もあつたと聞く。また同二十六年(一八九三)にはキリスト教会堂も創設されている。

第三節 太田上杉神社の建立

一 上杉家からの神宝の下賜

このように上杉神社の遙拝式を継続してきた彼らにとつて、太田村への神社の建立は切実な願いであり、建設についての協議が重ねられた。¹⁸ その思いは次のようなものであつた(前掲山田「北海道太田村上杉神社由来」)。

吾等同郷人五拾余戸三百二十余名、手を提へて当道に移住(中略)北海の一米沢を形造るに至れり(中略)山海數百里を隔つるも、豈に累々血食の地を忘了せんや。是に於て上杉神社を建立して、聊か記念の一端を表せんことを議決し、時機の至るを俟てり。明治廿四年四月廿九日第一回遙拝式を執行せし以來、毎年怠ることなかりき。

そして上杉家から神宝となる謙信と鷹山の所縁の品を下賜される機会は、明治二十八年(一八九五)三月、太田村の屯田兵(そのうち旧米沢藩士は六十二名)が清国に出征(日清戦争)することとなり、彼らが東京に赴い

たときに実現する。その顛末は次のようである。

同月三十一日に東京に入った彼らは、毎日七時間の練兵に明け暮れたが、四月十七日には日清講和条約が結ばれて、戦地に赴くことはなかった。この間、四月七日には有爲會の東京部会が飛鳥山公園（東京都北区）で運動会を計画しており、彼らも招待されていたこの行事の広告（『雑誌』一八九四年三月第四三号「米澤有爲會東京部大運動会広告」）には次のようにある。

（前略）我從^{上杉茂憲}三位公に於ても深く此旨意を賛成せられ、士氣を養成するの御趣意を以て、一切の経費を給与せられ、且つ親臨の榮を賜はらんとす（中略） 上杉伯より酒肴を賜はるに付き会費を要せず（中略）

●春日杯は諸君の勇氣を百倍すべし（後略）

茂憲もこの運動会の趣旨に賛同し、全ての経費を負担し、行事最後の酒宴では「春日杯」で饗応される。「春日杯」は、謙信が愛用した漆塗りの酒杯である。この酒杯によつて謙信との結びつきを与えられることは「勇氣を百倍」するほどの感激であつたに違いない。

結局、八日は雨天中止となり同十五日に行われた。八日は日曜日の休日にもかかわらず武装検査が行われ、十五日も参加できなかった。「是に於てか水泡に帰し去り、いと残念のことなり」と、同郷の人々と会する機会を失つたことを非常に悔やんでいる。その後同二十八日は終日の外出日となり、茂憲の招待を受けた米沢人一同が、湯島天神内の魚十料理屋での予餞会に出席した（『茂憲年譜』同日の条）。

北海道屯田兵ニシテ、征清従軍ノ旧米沢藩士六十二人、午後一時参邸ニ付、上杉神社ノ神前ニ於テ、春日杯ヲ以テ神酒及献饌中ノ勝栗大豆ヲ賜ハリ、夫ヨリ天神社内魚十二於テ神酒被遣（中略）同所ニ於テモ、春日盃ヲ用ヒサセラレ、皆々孰レモ難有頂戴、夕刻退出セリ。

一同は、上杉邸内の上杉神社（米沢の上杉神社を勧請）に参拝し、その後は予餞会に出席し、いずれでも謙信所用の「春日杯」で神酒を賜った。茂憲はこれより前同年三月三日には、同じく清国に出兵する米沢出身の近衛師団に属する将士を招いて予餞会を開いたが、そこでもこの時と同様に「春日杯」を用いて饗応している（『茂憲年譜』同日の条）。

その後五月二十日には、平和に関する勅諭の奉読と司令官の訓示があり、二十五日には東京を発つこととなる。神社の建立を上杉家に直接請う機会は、この東京滞在中を逃してなく、再び代表者が上杉邸を訪ねた²⁰（日時は不明）（前掲山田「北海道太田村上杉神社由来」）。

是の時に当り、柿崎家善^{かせん}、市川慎一郎、本庄孝長^{こうちやう}等の諸氏、一同を代表して上杉伯邸に参候し、謹て武尊公御尊影並に鷹山公御真筆を拝領して、永く記念とせんことを陳情せり。幸に嘉納あらせられ、親しく之を賜はる。因に記す。武尊公御尊影は、元七軒町照陽寺の秘蔵に係りしものなりと云ふ。五月二十九日、奉じ還りて、堂宇建立の議を老父に図る。咸奮て事を挙げんことを約す。

ここで上杉家から下賜された画像は「七軒町照陽寺の秘蔵」とあるが、これは誤りで、照陽寺は関東管領上杉憲政の菩提寺である。この画像は、照陽寺に隣接する謙信開基の常安寺が所蔵する「鏡御影」の模写である。「鏡御影」は、謙信が常安寺の泰廉門察のために鏡に写して描いた自画像といわれる。この画像は三代藩主綱勝の命により修理されるなど、歴代藩主が謙信崇敬の対象としたものでもある。この画像を、明治二十三年（一八九〇）に常安寺の住職上楢密山が茂憲の許可を得て、石盤摺にして関係者に頒布した。このうちの一幅とみられる²¹。画像とともに由緒書も頒布されたが、現存しない。

一方の「鷹山公御真筆」は現在確認できない。鷹山への崇敬については、本庄氏の旧知行地であった白鷹郷（西

置賜郡白鷹町)では、鷹山が養蚕神として祀られた例がみられた。また、旧藩領小国郷(西置賜郡小国町)では、遠方のため米沢へ日帰りで祭典に参拝できないことから、上杉家から謙信と鷹山の遺物を下賜されて上杉神社を建立した(明治十一年(一八七八)創建)。その際の趣意書の中には次の一項が記されている。²²⁾

一 鷹山公、千苦万苦大慮ヲ煩ワサレ、産業無之テハ民不富ト被思召、戸毎ニ桑樹ヲ下賜サレ、養蚕道ヲ被開シヨリ、今日ニ至リ戸々活計相立候。此高恩永生忘却スヘカラス。

鷹山から桑苗を下賜され養蚕の道が開かれて生計が成り立つようになった。この恩は永生忘れてはならないとされている。小国の上杉神社は、この他四ヶ条の鷹山の民政に対する恩沢をあげて寄付を募り、すべて民費で建立された。このように鷹山の民政は、旧米沢藩領の人々にとって、「此高恩永生忘却スヘカラス」もので、鷹山に対する崇敬の強さが知られる。

二 神社の建立

太田村では、このふたつの謙信と鷹山の遺物を下賜されて、神社の建設が進められていく。この建設工事は全て寄付金でまかなわれた。²³⁾ この寄付には、南兵村の中隊長岩淵繁隆、厚岸町判事梅澤退輔をはじめとする篤志寄付者十二名と屯田兵六十七名が名を連ねている。梅澤は第一回遙拜式で講義も行っており、最も高額な寄付をしている。岩淵がそれに次いでいる。また一般寄付の中には神社の近隣に居住する他藩出身の者三名も確認できる。

しかし十月になっても思うように進まず、有爲會組合會が事業を継続した。十二月になってようやく、多年の志を貫徹して太田上杉神社が完工した。社の規模は、社園三百二十余坪、堂宇三坪二合五夕、総桂材造で、その

地方に比すべきものがない緻密な建築の社であったという。御神体の鏡の台座は、上杉家の紋所にちなみ、竹に飛雀を彫刻した特別なものとなっている。一般的には雲形であるが、特に上杉家を意識して創られたものである。

同月二十五日に、寒風の厳しい中にも関わらず臨時祭典が盛大に行われた。

翌二十九年（一八九六）四月二十九日には例祭を執行し、神社運営の規約を定め、毎年五名の社務掛を置いて、維持法を堅く守って運営することとした。さらに同三十年（一八九七）には、当地の寒冷な気候を勘案して、祭礼日を陰暦四月二十九日としている。

神社の建設地は、山田理一郎の記事では、市川慎一郎宅地内としているが、隣の林留次郎の宅地内が正しい。現在の太田四の通り沿いの「開拓天然記念物・太田屯田の赤松」の道路を挟んだ向かい側である。この神社が建立できた要因としては、清国に出兵する旧藩士が上杉邸に招かれたこと、その中に茂憲と直接交渉できる旧侍組の本庄、柿崎、市川の三氏があり、神宝となる謙信画像と鷹山真筆が下賜されたことがあげられる。

さて、このようにして太田上杉神社は建立、運営されていくが、前述のとおり屯田兵の予備役になると生活に困窮する者も出始め、離村する者も相次ぎ、さらに日露戦争での戦死者も出た。明治末期には太田村の人口は開村時から半減したといわれ、²⁴神社の運営にも影響してくる。

その後の神社祭典をみると、明治三十七年（一九〇四）には六月十二日（旧暦四月二十五日）に行われ、「上杉神社祭典執行相成候二付、一重持参、社前へ集合致候」²⁵とある。これをみる限り質素な祭典であった。「一重持参」とは、各家々が料理を重箱ひとつに詰めて持ち寄ることである。

本論は調査対象を大正八年（一九一九）までとしたため、その後の詳細は追わないが、離村者の増加による組織の維持困難と財政の逼迫、社殿の老朽化により、太田上杉神社の社殿は平成元年（一九八九）に解体され、²⁶現

在、跡地は林になっている。御神体や棟札、謙信と鷹山の画像、関係書類等が屯田記念館に寄託保管されている。結果的には、神社を維持できなかったが、太田上杉神社が屯田兵として入植した人々の精神的な支柱であったことは疑いない。

遠藤由紀子氏は、太田上杉神社を「遙拝所型」で帰属意識は「故郷」としている。²⁷しかし筆者が分類するならば、「藩祖祭神型」で帰属意識は「旧藩（旧藩主家）」である。確かに初めは遙拝式を行っているが、最終目的は神社の建立であって、また謙信と鷹山の遺物をもって神体とすることにあつた。単なる望郷の念ではない。

三 太田米澤会の寄託した神社関係史料

太田上杉神社が解体された後、太田米澤会は、平成三年（一九九一）屯田記念館の開館に合わせて神社関係等の史料を寄託した。これらのうち筆者が現地で確認した、謙信と鷹山に関わるものをいくつかあげてみたい。

①太田上杉神社御神体（御神鏡）

一般に御神鏡の台座は雲形になっているが、太田上杉神社のものは、竹の半円でその中央に飛雀を彫刻している。これは上杉家の家紋「竹に雀（上杉笹）」を意識して特別に造られたものである。鏡自体は普通のもので、裏には「高砂」と彫られている。

②上杉謙信画像（鏡御影複製品）

前記のとおり東京で茂憲から下賜されたものである。

③上杉謙信画像（上杉茂憲下賜品）

天正六年（一五七八）に高野山無量光院に納められた謙信寿像が、明治二十八年（一八九五）の高野山大火で同院も画像も消失した際に、茂憲がこれに代わるものとして納めるために作成（石版摺）した画像のうちの一軸である。同三十二年（一八九九）に無量光院ほか関係寺社及び個人計三十四名に贈られ、太田上杉神社もその中に含まれている（『茂憲年譜』明治三十二年一月二十七日の条）。代表的な謙信画像として知られている。画像と由緒書が紙の状態を下賜され、所有者それぞれで表装が異なっている。太田上杉神社では由緒書が現存しない。

④ 上杉鷹山画像

この画像には署名はないが「雲澤之印」の落款がある。同様の鷹山画像で「信好「雲澤之印」と署名落款のあるものが米沢市や白鷹町で複数確認される。作者は幕末から明治にかけての米沢藩御用絵師の目賀多雲澤信好である。法音寺所蔵の鷹山画像とほぼ同じである。白鷹町の養蚕講の本尊として祀られたものにも同様のものがあり、同地の領主であった本庄孝長が持ち込んだ可能性もある（白鷹からの入植は本庄のみ）。画像に比べ表装が新しく、後に修繕したものと思われる。

⑤ 太田上杉神社棟札

神社の棟札には、「奉齋祀正一位嘉澤稻荷神社御霊實」（筆者祭祀の稻荷神社棟札より）等と中央に書かれるのが一般的であるが、これには中央に「棟札 棟梁 鈴木力馬 駒澤貞治」とあり、その両脇に建築費等、下段に大工と木挽の六名の氏名が書かれている。「上杉神社」の名前はみえない。上段左上に「明治廿八年八月十四日」とある。棟上祭の日付かと思われる。鈴木力馬と駒澤貞治は旧米沢藩士である。

⑥ 祭典の祝詞「上杉神社祭典 淳辞」

神社の祭典で奏上された祝詞である。末尾の余白には、明治三十七年（一九〇四）から大正十年（一九一五）

までの祭典の執行日が記されている。その一節に次のようにある。

年旧留久大神等乃恩頼乎蒙布留賀故、報比奉良牟止、旧大神乃臣等、柿崎家善、本庄孝長、外五十七名、思比仁思比議

利議利氏、御陰乎尊比喜比嬉比奉利（中略）家善、孝長外五十七名之人々等、洩留事久墜留事久、農業牧畜業乎毛、

弥進尔進美弥益々仁富栄志米給比（後略）。

前段では、古くから大神（謙信・鷹山）の恩頼みたまのふゆ（神威）を蒙ってきたので、旧臣柿崎、本庄他五十七名がそのお蔭を尊び喜んで奉仕するとし、後段では五十七名が漏れることなく欠けることなく、農業や牧畜業に励んで、ますます栄えることを祈っている。武人の謙信にも農耕牧畜繁盛の願いが捧げられている。

【牧畜業】は「農業」の右に補筆されている。農業が振るわなくなると牧畜に切り替える者も少なくなかった。

また文中「柿崎家善、本庄孝長、外五十七名」とある脇には「仁一郎、秀長、他十八名」と薄くペン書があり、長く同じものが使われていたことが知られる。仁一郎と秀長は、家善と孝長それぞれの長男である。村を離れて人数が減っていく中でも祭礼が続けられていたことを示している。

第四節 他藩の神社建立と遙拝

同じく太田村に入植した例をみれば、旧新庄藩士（入植三十三戸）は、明治二十三年（一八九〇）に旧藩主戸澤家歴代十一柱を祀る戸澤神社の建立を計画した。しかし何らかの事情で建立はかなわず、「戸澤神社」と刻した石碑のみを建てた。石碑は現在、太田一の通り沿いの鎮守妙見神社の奥にある。かつての事業所（各通りに設けられた共同作業場）の敷地である。

新庄で旧領民により新庄城址に戸澤神社（祭神は戸澤氏の祖平衡盛（平清盛の叔父忠正の孫）と初代藩主政盛）が建立されるのは同二十七年（一八九四）であるから、地元我先駆けての試みであった。太田村では歴代十一代をすべて祭神にしようとした。これは歴代が善政を布いて慕われたことを表すのである。例えば五代藩主正誥^{まさのむね}は、宝暦の大飢饉の翌年宝暦六年（一七五六）に幕府から三千俵の米を借上げ村々に分配し、城内本丸に氏神として祭祀していた天満宮の御輿を城下に巡行させ、一般庶民にも参拝させて安寧を祈願させている。

前述したが、太田村には村社豊受神社が建立され、村の鎮守社として旧藩のいかんを問わず祭典に参加していたことから、太田上杉神社も戸澤神社（石碑）も所縁の者による私的な信仰、精神的支柱としての建立であった。

なお妙見神社も、農耕馬の健全を祈るために、旧米沢藩士石墨哲蔵（神官大講義）が相馬太田神社（旧妙見社、福島県相馬市）から分霊を受けたものである。石墨は志半ばで病死したが、その遺志を継いで村内有志が明治二十七年（一八九四）に建立した。相馬太田神社は、相馬野馬追い神事を司る三社のひとつである。

また同じく太田村に入植した旧高田藩士（新潟県上越市、入植二十七戸）では神社を建立しなかったが、旧藩祖榊原康政を祀る高田の榊神社（明治九年（一八七八）建立）の例祭日にあわせて式典を行っている。³⁰

あるいは、札幌郡琴似村（札幌市西区琴似）に入植した旧仙台藩士（宮城県亶理郡の亶理伊達家中）は、明治八年（一八七五）、亶理伊達家初代の成実（^{しげさね}武早智雄命、^{たけはやおののみこと}伊達政宗の重臣）を村の日登寺境内に祠を建て武早神社として祀った。その後、社地の寄進を受けて遷座し、さらに明治四十四年（一九一一）には札幌神社（現北海道神宮、札幌市）から大国主大神の分霊を受け、大正四年（一九一五）には郷社に列している。³¹亶理の亶理要害に武早神社（現亶理神社）が建立されるのは明治十二年（一八七九）であるから、これも地元我先駆けての神社建立であった。³²

このように、入植した人々が、出身地ごとに旧藩所縁の神社を建立、または遙拝したことは、単なる望郷の念から起こったものではない。特に地元我先駆けて神社の建立が図られていることは、彼らがその先祖から代々受け継いできた、旧藩主家の先祖や歴代藩主（領主）への崇敬の念によるものである。それを精神的な支えとして、過酷な兵役や重労働を乗り越えようとしたのである。戸澤神社も武早神社も帰属意識を旧藩とする「藩祖祭神型」の神社といえよう。

まとめ

明治維新後、旧藩士が職を求めて米沢を離れた例は少なくない。彼らが新天地で精神的な支えとしたのは、やはり謙信や鷹山に対する崇敬の念であった。全国各地の有爲會支部では、上杉神社の祭典に合わせて遙拝式を行った。また屯田兵として北海道に渡った人々は、当初から上杉神社の遙拝式を行っていた。日清戦争に出征するため上京した彼らは、旧主茂憲に請い、入植した太田村に上杉神社を建立することを許可された。

米沢の上杉神社建立にも関わった彼らが、米沢を離れた全国各地から遙拝し、また入植した地に神社を建立することは、単なる望郷の念によるものではない。彼らの先祖代々から精神的な支えとして受け継がれてきた、謙信の義勇と鷹山の民政に対する崇敬の念によるものであり、彼らの帰属意識は旧藩主家であったといえる。

藩政期には謙信や鷹山に対する崇敬の念を示す史料は極めて少ないが、明治期の『雑誌』にはそれが具体的に表されており、これを明らかにできた。また、これまで謙信の画像が礼拝の対象とされたと明記している史料は管見しなかったが、『雑誌』の記事により、謙信や鷹山の画像、上杉家の旗が礼拝の対象であることも明らかに

することができた。

なお本稿作成にあたり、協力をいただいた厚岸町海事記念館文化財係長菅原拓己氏、厚岸町太田屯田開拓記念館、旧米沢藩士屯田兵四世の本庄俊長・良子氏夫妻、また本ホームページに投稿の機会を与えてくださった関係各位に感謝の意を表したい。

(令和二年七月)

加澤昌人(かざわ・まさと)

昭和三十三年秋田県生まれ。元秋田県職員。平成十九年佛教大学大学院修士過程終了。

現在同大学院博士後期課程在学中。

元上杉神社宮司故大乘寺良文氏、元法音寺住職故高梨宥興氏に、謙信について教えを請う。

佛教大学鷹陵史学会会員、山形県立米沢女子短期大学米沢史学会会員。

上杉松岬両神社信仰会会員、米沢温故会会員。

- 1 拙稿「上杉謙信の祭祀の転換―御堂から上杉神社へ―」(『米沢史学』第三五号(二〇一九年)、山形県立米沢女子短期大学米沢史学会)を参照されたい。
- 2 有為會の歩みについては、松野良寅「米沢有為會百年の歩み」(『社団法人米沢有為會々誌』復刊第三九号、一九八九年、社団法人米沢有為會)、及び同「回顧・米沢有為會の百年」(『同』復刊第四九号、一九九九年、同)に詳しい。
- 3 『佛教大学大学院紀要』第四八号(二〇二〇年、佛教大学大学院)所収。

- 4 杉原謙は、『有爲會雑誌』第八〇号（一八九〇年、有爲會假事務所）に「上杉鷹山公」を連載した。また自費出版に鷹山と莅戸善政についての『水魚篇』（一八九二年）、善政についての『莅戸太華翁』（一八九八年）、先祖杉原親憲についての『杉原親憲傳』等の著作がある。
- 5 駐日本国アメリカ合衆国大使キャロライン・ケネディ氏が平成二十五年（二〇一三年）に来日した最初の講演で、「私の父は（中略）上杉鷹山を尊敬していました」と述べている（『山形新聞』二〇一三年一月二八日号）。また同大使夫妻は、同二十六年（二〇一四年）に上杉家当主邦憲夫妻の案内で私的に米沢の上杉家廟所に参拝している。
- 6 この塔は平成二十三年（二〇一一）の東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）で塔頂部が倒壊し、現在は金鶏の像を基壇上に設置している。
- 7 『新厚岸町史・資料編四』（厚岸町史編集委員会編、二〇一六年、厚岸町）の「一五・太田村誌」による。
- 8 この柿崎家及び本庄家の所蔵文書を高嶋弘志氏が翻刻している。「厚岸柿崎家文書の紹介」（『人文・自然科学・釧路公立大学紀要』第四号、一九九二年、釧路公立大学）、「厚岸本庄家文書の紹介」（『同』第五号、一九九三年、同）、「太田村屯田兵の日記」（『孝長日誌』の紹介と解説）（『同』第六号、一九九四年、同）、「本庄孝長『要旨の覚』」（『日露戦争と太田村』）（『同』第七号、一九九五年、同）、及び「本庄孝長『要旨筆記』」（『兵村解体期の太田村』）（『同』第八号、一九九六年、同）である。
- 9 以下、本項の引用は特に示さない限りこの記事による。
- 10 『西野家行囊帳』（高嶋弘志翻刻解説、二〇〇〇年、厚岸町教育委員会）による。本史料（厚岸町有形文化財）は、旧新庄藩土西野嘉太郎の生涯を弟の要三郎が回想し、太田兵村の様子を挿絵入りで記録したもので、当時の状況が知られる。この中には、西野家の者が太田村を離れる際に、隣家の柿崎家の米山薬師に手を合わせている場面も描かれている。
- 11 『厚岸の史実』（大谷乾一郎編、一九六八年、厚岸町）「一九・往時を語る（三四）太田村屯田兵入地表」による。

- 12 『葛麓・複製版』（新庄市教育委員会編集発行、一九八三年）所収。本誌は大正七年から昭和十九年まで（一九一八〜四四年）新庄の葛麓社が発行した月刊の郷土雑誌である。
- 13 屯田記念館の展示資料による。諡に「童子」「童女」がつく者が十一名見られる。
- 14 前掲10『西野家行囊帳』の解説及び前掲5『厚岸の史実』の「二六・明治大正時代・太田村」による。
- 15 『屯田移住本庄家風雪百年』（本庄俊長編、一九九三年、自家出版）の本庄憲一「屯田移住本庄家物語」による。
- 16 前掲2太田弘志「太田村屯田兵の日記『孝長日誌』」には五月一日とある。山田理一郎の記事は五年後に書かれたものであり、日記が正確と思われる。
- 17 前掲11『厚岸の史実』の「一五・太田村誌」及び現地での聞き取りによる。
- 18 前掲8太田弘志「太田村屯田兵の日記『孝長日誌』」の翻刻史料は、明治二十四年九月から同二十五年六月までの記録であるが、同二十五年一月二十三日と同二月十三日に上杉神社新築のための集会を開いた記事がある。集会の内容は記されていない。
- 19 『雑誌』一八九五年十一月第五九号の周芳迂夫「従軍雑記」及び同年十二月第六〇号の同「従軍雑記（續）」による。周芳迂夫はペンネームで実名を特定できない。
- 20 名前のルビは当時の現地の呼称によった。旧米沢藩士の間では、「かぜん様」「こうちよう様」と尊称したいう。
- 21 上相密山の画像作成は『茂憲年譜』明治二十三年一月二十五日、同二十六日、及び二月二十二日の条にみえる。
- 22 『小国町誌資料・第四巻』（小国町教育委員会編、一九九二年、小国町）による。
- 23 『明治二十九年二月調 上杉神社分社建築寄付名簿』（太田米澤会蔵、屯田記念館寄託）による。ここには「上杉神社分社」とあるが、東京上杉邸の上杉神社の分霊とみられる。米沢の上杉神社との交渉はみられない。
- 24 前掲8高嶋弘志「本庄孝長『要旨之覚』」による。

- 25 前掲8 高嶋弘志「本庄孝長『要旨之覚』」による。
- 26 遠藤由紀子「根室地域における屯田兵村と神社の研究―士族屯田としての和田兵村と太田兵村を中心に」(『昭和女子大学文化史研究』(二〇)、二〇〇六年、昭和女子大学文化史学会) 及び現地での聞き取りによる。その後の神社の運営については遠藤論文に詳しい。
- 27 前掲26 遠藤由紀子「根室地域における屯田兵村と神社の研究」及び『近代開拓村と神社―旧会津藩士及び屯田兵の帰属意識の変遷』(遠藤由紀子、二〇〇八年、お茶の水書房) による。
- 28 前掲8 高嶋弘志「山形県土族の北海道移住について」及び現地での聞き取りによる。
- 29 『新庄市史・史料編・下』(二〇〇一年、新庄市) の第八章第三節「天満宮の祭り」及び戸澤神社ホームページによる。
- 30 前掲8 高嶋弘志「太田村屯田兵の日記『孝長日誌』」による。
- 31 北海道神社庁ホームページ「北海道内神社検索データベース」による。
- 32 亘理神社境内の説明板及び亘理町ホームページによる。